

〔論 文〕

## アーノルドの教養観 (その3)

Matthew Arnold's Conception of Culture (3)

後 藤 一 美

Kazumi Gotoh

本稿ではアーノルドの審美的な教養観を、その代表的な著作である『教養と無秩序』を中心に見てみよう。論に入る前に、アーノルドの教養観が決して単に審美的、文学的教養観ではないということを強調するために、特に確認しておきたいことが二点ある。

第一に『教養と無秩序』は副題に *An Essay in Political and Social Criticism* とあるように、『教養と無秩序』発刊当時(1869年)のイギリスの政治・社会状況を念頭に置いて書かれたものである、ということである。アーノルド自身も『教養と無秩序』の「序文」において、この著作の目的は「教養をイギリスの窮境を救うものとして推奨すること」と述べている。アーノルドの教養観は、一見非常に観念的、高踏的響きを持っているかに見えるが、その教養観はあくまでも当時の政治・社会状況を踏まえてのそれであり、決して現実と遊離した、偏頗な文学的、審美的論調ではない、ということである。

第二にアーノルドに『教養と無秩序』を執筆せしめた当時の政治社会状況とは、要約すれば、およそ次のような状況であった。すなわち、相次ぐ戦争を勝ち抜き、ナポレオンをも打ち負かしてヨーロッパに長期にわたる平和を招来したイギリス政府は、構築したイギリス国内の政治的社会的秩序を守るための非常に困難に直面していた。

それは、換言すれば、当時のイギリス社会を構成する三大階級(上流、中流、労働者階級)間の階級闘争といってもよい。産業革命によって台頭してきた中流階級を、さらには圧倒的な多数派をなす労働者階級を、既存の秩序にいかに組み込み社会的安定を確保するか、それがイギリス政府の当面する最大の国内問題であった。

中・下層からの民主化の要求、それは歴史上イギリスが直面したことのない未曾有の大きな社会的うねりをなす動きであり、もしこの収束に失敗すれば、政治を牛耳っている上流階級(貴族)の存立が脅かされ、内乱をも招きかねないという状況であった。これに加えて、国内を二分する国教徒と非国教徒間の宗教上の対立も深刻であった。

政治、社会、経済、宗教、思想、さらに教育など広範囲にまたがる「秩序の喪失」(アーノルドはこれを「無秩序」と呼んだ)をいかにして克服し、本来の「人間」のあり方の指針を示すことができるのか。アーノルドの『教養と無秩序』は、それを示すために書かれたものであり、その教養観は、如上の諸般のイギリスの現状を踏まえた上での提言なのである。

### 教養の本質はギリシア的な優美と英知

「教養」(culture)という言葉には、書物臭い、学術的な、そして無用なものの観念が含まれ

ていることは、アーノルド自身が『教養と無秩序』の冒頭で自認している。が、アーノルドは、教養に対するこのような世俗的偏見をしりぞけ、真の教養人を定義して「粗暴で粗雑、難解で抽象的、専門的で排他的な知識をすべて排除して」(to divest knowledge of all that was harsh, uncouth, difficult, abstract, professional, exclusive)、「知識を人間化し」(humanise knowledge)、「公平な心で…事物を如実に見る目を持ち」(disinterestedly ... to see things as they really are)、「総体的な完全の追及をめざして(a pursuit of our total perfection)…その時代の最善の知識・思想(the best knowledge and thought of the time)を知り、旧来の思想・習慣に新鮮で自由な思想を広めること」であるとし、それが教養のもっとも大切な本質」とするのである<sup>1)</sup>。

教養の本質や属性についてのこのような見解は、『教養と無秩序』中に、言葉を換え、さまざまな形でアーノルドは言及している。例えば、教養とは「真の人間の完全への努力、人間性のあらゆる面の発達、社会のあらゆる面の進歩、一般的完全」という言葉がその一例である。(アーノルドが教養を単に個人の心の次元だけで捉えず、広く社会との関連で捉えているのは注目に値する。アーノルドは、教養の真の価値は、教養を社会に広めることにあり、そうすることによって教養は道徳的になり完全なものになりうることを主張している)

教養を阻害する要因としての、さまざまな偏見や党派心に対する否定的姿勢も、アーノルドのこのような教養観から発したものである。当時の社会においては、人々の間にさまざまな偏見と党派心が先鋭的な形で存在していた。その代表例は、宗教の過度の重視と宗派の違いによる偏見と党派心である。当時のイギリスにはすでに多くの政治同盟が存在していたが、政治と宗教は密接に関連しており、とりわけ国民を二分する国教徒と非国教徒の対立は、社会に広範囲にわたる偏見と混乱を生み出す基となっていた。

特に粗暴な動きが目立つ非国教徒に対して、アーノルドは苦言を呈し、清教徒を中心とする非国教徒はまじめな人々であるが現今の社会の混乱は主に彼らによって増幅されているものであり「全体的調和」(totality)に欠ける彼らに対して、彼らの特徴である「偏狭、一方的であること、不完全」(that narrowness, one-sidedness, and incompleteness)たることをやめ、アーノルドの理想とする人間像、すなわち「人間性の、より完全にして調和的展開」(more full and harmonious development of their humanity)を期待するのである。

「全体的調和」(totality)の対語は、アーノルド自身のことばを借りれば偏狭な「党派心」(provinciality)でもある。アーノルドは、宗教界の主流をなす国教徒たちにも呼びかけ、偏見著しい非国教徒たちを私心なく寛大な心で受け入れるよう提言するのである。国教徒たちも、非国教徒たちほど顕著でないとはいえ、非国教徒たちと同様「党派心」に富む連中であった。

そして国教徒も、非国教徒も、ともに過度な宗教心、行き過ぎたキリスト教主義(Hebraism)を改め、イギリス国民が共通して抱えるべき権威ある精神的指針として Hellenistic な世界、すなわち優美と英知(sweetness and light)を本質とする古代ギリシア的精神に向かうよう呼びかけるのである。この間の事情を、アーノルドは次のように言っている。

Now, and for us, it is a time to Hellenise, and to praise knowing; for we have Hebraised too much, and have over-valued doing.

(今や我々にとって古代ギリシア化し、知識を重んずる時代がやってきた。我々はこれまであまりにもキリスト教化し過ぎ、行動を重視し過ぎてきたからだ)

そして偏見や党派心は、なにもここに代表例として挙げた宗教に限ったことではない。それらは社会の広範囲な諸面にわたるもの、現象面だけでなく人々の心に根深く巣くうもの、地域間、階級間などの偏見をも含めてさまざまな形で存するものとして人々の対立を増幅させ、社会の無秩序と混乱を招いていたのである。

さらに言えば、無秩序と混乱の要因は、これら集団間の対立に起因するものだけではなかった。人々個々人の心と行動の面にも広く無秩序が存在したのである。その無秩序とは、端的に言えば、産業革命が進行しつつあった時代の流れともいえる世間一般の物質主義的傾向、ダーウィンの「種の起源」(1859年)に代表される進化論的・自然科学的な思想の伸張とそれへの反発、そして放縦とも言える個人主義的傾向などであった。ちなみに「種の起源」は、アーノルドの『教養と無秩序』が出版されるちょうど10年前に出版されている。

周知のように、アーノルドが生きたビクトリア時代は、イギリスが世界史上例がない広大な大帝國を築き上げた時代である。ビクトリア時代の最盛期は世界最初の万国博覧会がロンドンで開催された1851年とされるが、この時代は、イギリスが世界の陸地の4分の1を、世界の民のこれまた同じく4分の1を支配下に置いた時代でもある。

アーノルドが『教養と無秩序』を執筆していた当時、イギリスは長期にわたる対外的平和と国家の安全保障を確立していたとはいえ、イギリス政府は、国内的には、勃興する中流階級、国民の圧倒的多数をなす労働者階級の諸要求にいかに対処するかに追われていた。この間の事情を、例えば現代の著名な歴史家である G. M. Trevelyan は、当時のイギリスの主たる関心事は戦争とか戦争準備ではなく、年ごとにすさまじい勢いで増加する外国貿易、新植民帝國的発展、人口過剰と失業、そして植民地への移住などへの対処であった、と述べている<sup>2)</sup>。

ビクトリア時代の社会的特徴は、しばしば民主主義、科学思想、そして実利精神(功利主義)と言われる。そして民主主義は選挙法改正が、科学思想は進化論で知られるダーウィンが、そして実利精神は哲学者・経済学者と知られる J. S. Mill が、それぞれ代表的なものとして挙げられるのが常である。

民主主義、科学思想、そして実利精神と言えば聞こえはよいが、アーノルドが多くの人々に実際に見た心の病弊は、もっと卑俗で野蛮なもの、身勝手に利己的な次元のものであった。アーノルドは『教養と無秩序』の第五章で、いみじくも次のように言っている。

But how generally, with how many of us, are the main concerns of life limited to these two: the concern for making money, and the concern for saving our souls!

(けれどもいかに広範囲にわたって、我々の多くの人々の生活の主な関心事が、これら二つの点に限られていることか。なんと金儲けへの関心と魂救済への関心である！)

多くの人々の心の病弊、それは貴族、中流、労働者階級を問わず存在する病弊であり、ギリシア的優美と英知に欠けるが故に起因する病弊であった。大半の人々が労働者階級に属していた当時であって、アーノルド自身は中流、それも視学官(School Inspector)という、今日の日本で言えば文部科学省の高官に相当する社会的階級に属しており、国や社会の動向を大所高所から見る事ができる立場にあった。

と同時に、視学官としてさまざまな地域の学校を訪れ、地域のさまざまな階級の人々、とりわけ当時“the lower middle class”(中流の下層)と呼ばれていた人々、彼らは多くが非国教徒の小

規模経営者・実業家であり、アーノルドが視察した学校の経営者であったり生徒の父兄であったりしたのであるが、これらの人々との接触をとおして、アーノルドは、貴族や中流だけでなくこれら国民の大多数を構成する人々がアーノルドの嘉する“human perfection”とは程遠い状況にあるということを痛感していたのである。

社会が当面する政治経済などについての具体的施策よりも、人々の心に拠るべき権威ある指針を与えること、「教養をイギリスの窮境を救うものとして推奨すること」を、アーノルドは何にもまして優先させるべきこと、と考えたのである。そしてこのような考えは、時に指摘されるアーノルドの政治経済など社会科学に対する無知から出たものではないのは明らかである。アーノルドは言っている。

the idea which culture sets before us of perfection, ——an increased spiritual activity, having for its characters increased sweetness, increased light ... is an idea which the new democracy needs far more than the idea of the blessedness of the franchise, or the wonderfulness of its own industrial performances.

(教養が眼前に掲げる完全の観念、すなわち豊かな優美と英知という性格を持つ豊かな精神活動は、新しい民衆が選挙権の恵みや産業活動のすばらしさよりもはるかに必要とする観念である)

アーノルドは、あとで述べるように、現実を如実に、あるがままに直視することを重視した人である。それと同時にアーノルドは、事象を本質的・本源的に見、それが本来あるべき姿(理想像)において見た人でもある。そのアーノルドが時代と社会を直視して人々が拠るべき規範として思い描いたのがヘレニズム、すなわち優美と英知を本質とする古代ギリシア的世界である。

周知のように、古代ギリシアは、数多くの都市国家(ポリス)によって形成されていた。アリストテレス(B.C. 384-322)当時、都市国家は150を超えていたとされている。そしてアテネを代表格とする古代ギリシアにおいては、何よりも「美」に価値が置かれたことが知られている。知識も、生活も、そして肉体も、すべてが美化されねばならない、人生の目的はすべてを美化すること、とギリシア人は考えたのである。

ギリシア人の求める美的秩序が「均整と調和」であったこともよく知られていることである。ギリシア人は、人間の、そして人間生活におけるあらゆる面の偏りなき円満な美化を、均整と調和に基づく美的世界を求めた。「均整と調和」に反すること、すなわち特定の面の過重や不足は、彼らの美の観念に反するもの、非美的なもの、善でないもの、あるいは真ならざるもの、とギリシア人は考えた。ギリシア人は、思想や建築、あるいは彫刻などの美のみならず、動作や姿勢の美、表情の美、さらには声の出し方(発声)や歩き方(歩態)に至るまで美的であることを求めたといわれている。そして美こそ善であり、かつ真であるという思想、いわゆる「善美」の思想を保持していた。(英語で言う「善美なるもの」“the beautiful and the good”を、古代ギリシア人は一語で表す語彙を持っていたことはよく知られていることである)

アーノルドがいう教養の属性である「知識の人間化」、「総体的な完全の追及」、あるいは「真の人間の完全への努力、人間性のあらゆる面の発達、社会のあらゆる面の進歩、一般的完全」という言葉には、このような古代ギリシア的な審美思想が投影されているのである。そして「優美と英知」という標語は、美的にして知的な社会と個人の出現を願うアーノルドが掲げた

絶妙の標語なのである<sup>3)</sup>。そしてとりわけ留意すべきは「優美」(sweetness)という言葉である。イギリスの詩人たちの多くは詩論をものしているが、それらの中で「美」をさして使われる言葉は“beauty”が通例である。アーノルドのいう“sweetness”は意味深長で、それはありきたりの平板な美を超えた美、人間の肺腑を突き心底を揺るがすような美、しかも洗練された至高の美を意味しているのである。

真美なるもの、あるいは本源的な知は、元来直截簡明なもの、素朴にして単純なもののはずである。回りくどくて難解なもの、多言を要する複雑なものは、真美としては二流以下のものであろう。眼で見、耳で聴き、読んで直截簡明に心に響くもの、明快なもの、例えば優れた絵画、優れた音楽、あるいは優れた詩などは、優れて真美なるものの部類に数えることができるであろう。そしてこれらのものは、本来持っているその優れた価値によって多くの人に感銘を与え、余人の追従を許さない独創的なもの、創造的なものとして高い尊敬を得ることができる。

一方、回りくどくて難解なもの、多言を要する複雑なものを教室で教え、論文という形で生産(多くは再生産)しているのが大学である。筆者はこの論文の冒頭部分で真の教養人を定義して「粗暴で粗雑、難解で抽象的、専門的で排他的な知識をすべて排除して知識を人間化」というアーノルドの教養観を引用したが、このような教養観とは逆方向の「粗暴で粗雑、難解で抽象的、専門的で排他的な知識」が支配的勢力を得ているのが大学である。すなわち大学は、アーノルドの言う教養の本義、「優美と英知」あるいは「知の本源」とは遠く隔たった異質の存在なのである。

宗教は、たとえ元が同根であっても、宗派が違えば異端者を排除しようとするであろう。あるいは大学における「教養」の位置づけは、「悪貨は良貨を駆逐する」というあの有名なグreshamの法則を想起させるであろう。価値的に二流のものが一流のものを追い出すという、世間でしばしば見られるあの構図である。真の教養の観念とは程遠い者が多数派を占める大学、とりわけ日本の大学から「教養」が疎外されるのは、それ相応の理由があるのである。

アーノルドが掲げるギリシア主義とはヘレニズム、『教養と無秩序』の第四章「ヘブライズムとヘレニズム」に掲げられたヘレニズムの精神である。そのヘレニズムとは、アーノルド自身の言葉を借りれば「素朴で魅力的な理想をなし…この理想の素朴さと魅力ゆえに…一種の靈妙な落ち着き、明快、そして燦然たる輝きを運び…いわゆる優美と英知に満ち満ちたもの」(the simple and attractive ideal ... and from the simplicity and charm of this ideal, Hellenism ... is invested with a kind of aerial ease, clearness, and radiancy; ... full of what we call sweetness and light.)なのである。

単純にして明快なもの、本源的にして基本的なもの、しかも魅力的な優美と英知が調和したヘレニズム的世界を、アーノルドは人々と社会が抱えるべき基本的方向として唱導したのである。

前にも述べたとおり、『教養と無秩序』は当時の政治・社会を念頭に置いて書かれたものである。内容的には、それは、当時の宗教にかかわる状況、自由党などの政治活動、貴族・中流・労働者階級などの行動や心性、個々人の性行、教育界の状況などを通観した上で、イギリス

の社会と個人が抱えるべき理念・方向として優美と英知を掲げたものである。

にもかかわらず、アーノルドのこの著作が審美的・文学的とされるのは、優美と英知につながるものとして「詩」を引き合いに出しているからである。広く当時の政治と社会を念頭に置いて書かれたこの著作においては、詩や詩人に関する直接的な言及はわずかである。けれども、アーノルドの文学論、とりわけ一連の詩人論を知る者にとっては、『教養と無秩序』中の片言隻句にも詩的教養こそ真の教養とするアーノルドの本領を感じざるを得ないのである。以下、主にその詩論を援用しながら、アーノルドの教養観の相貌を見てみよう。

## 教養の観念は詩の法則と一致する

アーノルドは『教養と無秩序』の中で次のように言っている。

In thus making sweetness and light to be characters of perfection, culture is of like spirit with poetry, follows one law with poetry.

(このように優美と英知を完全の特徴とする点において、教養は詩と同様の精神をなし、詩と同一の法則に従う)

教養の本質は優美と英知であると繰り返し説いているこの『教養と無秩序』において、教養と詩の密接な関係が直接に語られているのはこの箇所だけである。この言葉が、アーノルドの教養観と関係して、どのような広がりを持っているのだろうか。

アーノルドが教養の本質を詩的教養と同一視するのは、詩が優美と英知を本質とするもの、教養がめざす「完全」の観念を表現しているもの、と考えるからである。アーノルドは若き時代は自身が詩人であり、ビクトリア中期の詩壇にあっては、テニソンやブラウニングに次ぐ優れた詩人であった。

そしてアーノルドは、単に詩人であるだけでなく、その豊かな学殖、数ヶ国語に精通した豊かな語学力によってイギリスのみならず、古代ギリシア、イタリア、フランス、そしてドイツなどの古今の詩に通じ、同時にオックスフォード大学の「詩学教授」という非常に名誉ある地位の経歴者でもあった。つまりアーノルドは、豊富な詩作経験を持つ詩人であるのみでなく、詩の批評家としても当時ほとんど比肩すべき者がいないほどの大きな存在であった。

(ちなみに、アーノルドは膨大な著作を遺しているが、それら著作の多くは彼の職業であった視学官・教育者としての立場からのもの、あるいは宗教や社会批評家としての時事的な内容を含んだものであり、詩論をはじめとする文学論は比較的少量である。にもかかわらず、アーノルドが英文学史上最大の文学批評家とされるのは、その批評を通して詩を単に芸術や文学という狭小で専門的な枠に閉じ込めずに一般化し、人生や社会との関連で相対化して論ずることによって詩の持つ真の意義、つまり詩の効用と価値を、鋭い確かな言葉で人々に提示したがゆえである。つまり、批評家としてのアーノルドは、詩の価値を体系的に人々に提示した、きわめて独創的で卓抜な器量の批評家だったと言える。高い視点からの簡潔にして鋭いその評言は、しばしばアーノルドを「言葉の名人」と言わしめ、その批評論は今日においても文学研究者に多大な影響力を持っている。今日の批評用語についてもアーノルドが用いた批評用語に負うものが多い)

アーノルドの詩観、すなわち、ここでアーノルドが言う「詩の法則」とはいかなる内容を持つものであろうか。以下、大きく二点を挙げてアーノルドの詩観(教養観)を論じてみよう。

アーノルドのいう詩の法則の第一点は、詩は美と真(真美)を本質とし、真美は「喜び」(人生の幸福)と結びついているとする思想である。『教養と無秩序』においても「教養」と「真の幸福」(true happiness)との密接な関連はしばしば言及されているけれども、このようなアーノルドの詩観を、我々は例えばアーノルドの詩人論の一つである『キーツ論』(Keats)に見ることができる。

アーノルドはキーツ(John Keats 1795-1821)の代表的な詩である *Endymion* の冒頭の句“A thing of beauty is a joy for ever”(美なるものは永遠の喜び)を引用して、キーツが愛した「美の原理」について次のように言うのである。

It is no small thing to have so loved the principle of beauty as to perceive the necessary relation of beauty with truth, and of both with joy.

(美と真との必然的關係、さらに美と真と喜びとの必然的關係を認めるほど美の原理をかくも愛していたことは、けっして小さなことではない)

その美しい詩、美をこよなく愛したがゆえに「美の使徒」と呼ばれるキーツは、胸の病を養うためイタリアのローマに滞在し、その地で若干25歳で客死した詩人である。その詩は短詩を中心に甘くも悲しい佳作が多く、イギリス・ロマン主義復興期の代表的な詩人の一人である。そして「美の原理を愛する」とはキーツ自身が自らの書簡中に述べている言葉であり、美が「喜び」であるとはキーツがしばしば詩に歌っていることでもある。

美に対するキーツの典型的な思想は、キーツの最も有名な詩のひとつである「ギリシアの古瓶によせるオード」(*Ode on a Grecian Urn*)の末尾に見られる。

‘Beauty is truth, truth beauty, — that is all

Ye know on earth, and all ye need to know.’

(美は真にして、真は美なり—それこそが

汝らがこの世で知る、また知るべきすべてなり)

美には優美、悲哀美、莊嚴美、さらには頹唐美(退廃美)、妖艶美などにいたるまで「無数の類型」がある。人が何らかの対象にかかわって、ある時、ある場面で美しいと感ずれば、それがすなわち「美」である。そして美は、美しいと感ずる時点で、すでに精神的・道徳的判断を、価値観を伴っているのである。

そしてキーツやアーノルドが言う真とは、単に事物を如実に、ありのままに見るというだけにとどまらない。真には美と同様に精神的・道徳的な意味内容が含まれ、さらに知的な価値認識(価値観)が含まれるのである。

真とは意味深長な言葉で、個人としての人生のあり方、個人を取り巻く社会のあり方、あるいはこの世を構成する二大要素である自然と人(文化)のあり方などすべてを含む広大無辺な広

がりをなす調和的全体の「本来のあり方」、すなわち「宇宙的理想像」の認識を意味している。アーノルドが『教養と無秩序』の中で、教養とは事物を「如実に見る、あるがままに見る」(to see things as they are)だけでなく、「宇宙的(全体的)秩序」(the universal order)において見ること、と述べているのも「真」の持つこのような広大無辺な調和的性格を念頭に置いて言っているのである。

そして何よりも重要な点は、『教養と無秩序』中のアーノルドの次の指摘である。すなわち、

The characteristic bent of Hellenism, as has been said, is to find the intelligible law of things, to see them in their true nature and as they really are. But many things are not seen in their true nature and as they really are, unless they are seen as beautiful.

(ヘレニズムの特徴的傾向は、従来言われてきたように、事物の明白な法則を発見し、事物を真の本性において如実に見ることである。が、多くの事物は、美的に見るものでなければ、真の本性においても、如実に見ることもできないのである)

美は真よりも高しという言葉があるが、アーノルドは、優れた審美眼なくしては事物のあるがままの姿を見ることもできず、事物を本来あるべき姿において、真の姿 (in their true nature) において描くこともできない、つまり英知が欠落するものと考えていたのである。「美・真・喜び」という構図において、アーノルドが「根源的なもの」として、何よりも美を優先して考えていた姿勢がここに窺えるのである<sup>4)</sup>。

ところで「美・真・喜び」という構図中の「喜び」についてはどうだろうか。

先にも触れたが、アーノルドは『教養と無秩序』において、優美と英知を本質とする教養を得ることは「真の幸福」を得ること、としばしば強調している。そして人は、貴族・中流・労働者という社会階級に関係なく幸福を追求するもの、と言うのである。

優れた詩に接したときの「喜び」は、それはアーノルドにあっては「実在」(reality)に接する喜びだった、と言えるであろう。「実在」の対語は「幻影」(illusion)である。例えば、アーノルドは、『ワーズワース論』(Wordsworth)の中で次のように言うのである。

Poetry is the reality, philosophy the illusion.

(詩は実在であり、哲学は幻影である)

ここに言う「実在」とは単なる自然的事実や物理的形象を意味しているのではない。単なる事実や形象を超えた、詩句の背後にある「本質的なもの」、換言すれば鋭い審美眼(想像力)に映る「真美なるもの」、あるいは「理想像」を意味しているのである。

そして想像裡に映る「理想像」の世界こそが本来の世界(実在)であり「喜び」でもあるというのは、詩人や理想家肌の人にとってはしばしばあり得ることである。京都大学の美学教授であった井島勉氏は、この間の事情を次のように言っている。

「美の原理も、更にその背後に、人間の深奥に求めらるべき高次の目的への連関を予想しなければならぬ…この美的体験の奥底には、厳粛な、しかし偽りのない、人間の生の契機を発見することになるかもしれない…人間は刻々にこれやあれやと特殊的に現実を生きていくが…本



来的な人間にとっては現実がむしろ仮象、夢のほうが現実…」<sup>5)</sup>

「實在」に接することの「喜び」は、さらに言えば、充実した高次の「人生」を生きることの「喜び」でもある。井島氏のいう「厳粛な、しかし偽りのない、人間の生の契機を発見すること」の喜びである。そして「實在」とは、言葉を換えて言えば、ワーズワースのいう「真理」(truth)でもある。

ワーズワースは、英文学史上の画期的な詩集とされる『抒情民謡集』(*Lyrical Ballads*)に、彼が長年にわたって熟考し心に温めてきた詩論としての「序文」(Preface)を付した。英文学史上屈指の有名な詩論である。

その「序文」の中で、ワーズワースは、

... its object is truth, not individual and local, but general, and operative; not standing upon external testimony, but carried alive into the heart by passion; truth which is its own testimony, ...

(詩の目的は真理であるが、それは個別的・局部的真理ではなくて一般的・生動的真理であり、外的証明に拠るのではなく熱情によって心に生き生きと運び込まれる真理であり、それ自体が自明の真理である)

と言うのである。ワーズワースの言葉を換言すれば、詩はすべての事に普遍的に適用される知の本源であり、本来生命体である人間の心に躍動的な生命感(幸福)をもたらしてくれるもの(真理)であり、それ以上分析・説明することができない根源的なもの、原理的なもの、ということである<sup>6)</sup>。

アーノルドにおける「實在」とは、上に引用したワーズワースの言を換えて言えば、次のように要約されるであろう。すなわち、アーノルドが詩において見たものは「真理、すなわち高次の価値を持った本質的なもの」であり、その真理は「広く有機的な影響力を持った真理、すなわちすべてのことに応用・適用できる根源的な原理」であり、「心に生き生きと感動をもたらすがゆえに確かに存在すると実感できる真理」である。

「實在」や「真理」についてのアーノルドのこのような考えは、以下に述べるアーノルドの「詩の法則」の第二点に関連して触れることにしよう。

アーノルドのいう詩の法則の第二点は、詩は「思想と芸術(技術)が一体化したもの」(In poetry, which is thought and art in one)とする思想である。これは以下のような文脈に出てくる言葉である。

アーノルドの代表的な詩論の一つに『詩の研究』(*The Study of Poetry*)という著作がある。1880年に公にされたもので、アーノルド58歳時の著作である。1869年に出版された『教養と無秩序』の11年後に書かれた著作であり、アーノルドの詩観の集成とも言うべき詩論である。

この詩論の中でアーノルドがまず強調するのが、人々を「教養」に導く媒体としての詩の役割の高さである。先にこの論文において「詩は實在であり、哲学は幻影である」というアーノルドの言葉を引用したが、当時の人々の間に盛行していた宗教や哲学に懐疑的だったアーノルドは、これら宗教や哲学に代えて詩を「教養」の媒体として推奨するのである。この『詩の研究』の冒頭部分でアーノルドは次のように言うのである。

The future of poetry is immense, ... More and more mankind will discover that we have to turn to poetry to interpret life for us, to console us, to sustain us. Without poetry, our science will appear incomplete; and most of what now passes with us for religion and philosophy will be replaced by poetry. ... our religion, parading evidences such as those on which the popular mind relies now; our philosophy, plumbing itself on its reasonings about causation and finite and infinite being; what are they but the shadows and dreams and false shows of knowledge?

(詩の前途は計り知れない…人々は、我々の人生を考え、我々をなくさめ、我々の心を支えてくれるには、今後ますます詩に向かわねばならないことを知るであろう。詩がなければ科学も不完全に見えるだろうし、現在宗教や哲学として通用しているものは詩に取って代わられるであろう…今日多くの人心が頼っている(宗教的に救われるとする)根拠を並べ立てた宗教、因果や有限無限のものについての推論を飾り立てている哲学。一体それらは単に知識の幻影、偽物にすぎないのではないか)

これに続けてアーノルドは、

But if we conceive thus highly of the destinies of poetry, we must also set our standard for poetry high, since poetry, to be capable of fulfilling such high destinies, must be poetry of a high order of excellence. We must accustom ourselves to a high standard and to a strict judgment.

(けれども、もし詩の使命をこのように高く考えるのであれば、我々は同時に詩の水準を高く設定しなければならない。なぜなら、そのような高い使命を全うすることができる詩は、卓抜な秩序を持った詩でなければならないからだ。我々は高い水準と厳密な判断に親しんでおかなければならない)

宗教や哲学が「偽物」とであると断じたあとアーノルドは、詩が「芸術」でありペテン主義が入り込む余地がないことを強調するために、ナポレオンとフランスの大批評家サント＝ブーブ(Sainte-Beuve 1804-69)にまつわる逸話を引用するのである。

ナポレオンがある人と話をしている時、あるペテン師のことが話題になった。するとナポレオンが、「ペテン師大いに結構、どこでもペテン主義(charlatanism)ではないか」と言った。サント＝ブーブはこの話を聞いて「なるほど…政治や人間支配術においては、それは多分本当だろう(Yes, ... in politics, in the art of governing mankind, that is perhaps true)。けれども、思想の秩序(道理)や芸術においては(in the order of thought, in art)、栄光や永遠の名誉は、ペテン主義が入り込む余地がないということだ。ここにこそ人間存在のあの高貴な役割の神聖さがある」と言った。

アーノルドは、サント＝ブーブの上の言葉を引用した後で、次のように言うのである。

「それ(サント＝ブーブの言)は至言であり、銘記しようではないか。思想と芸術(技術)が一体化したものである詩においては、ペテン主義が入り込む余地がないというのが栄光であり永遠の名誉なのだ」(It is admirably said, and let us hold fast to it. In poetry, which is thought and art in one, it is the glory, the eternal honour, that charlatanism shall find no entrance;...)

ここにアーノルドがペテン主義を持ち出したのには、充分な理由がある。真美を本質とする詩こそ「教養」の本質に通じるものと考えていたアーノルドは、詩の持つ将来の使命を重大なものと考え、それゆえ詩においては優れた詩と劣った詩を公平な批評眼によって峻別する必要があると考えていたからである。「とりわけ詩においては、これら峻別を「ペテン主義」によっていい加減にすることは許されない」(And in poetry, more than anything else, it is unpermissible to confuse or obliterate them)と考え、ペテン主義を排除すべきものと考えていたからである。

詩は「思想と芸術(技術)が一体化したもの」というアーノルドの詩観が典型的に見られるのは、「詩は詩的真美の法則(the laws of poetic beauty and poetic truth)の下に表現されていなければならない」という言葉である。これは端的に言えば、詩が優れた詩であるためには、優れた「内容」が優れた「表現」に支えられていなければならない、ということである。詩の内容と表現は密接不可分の関係にあるということである。そしてアーノルドは、一連の詩論・詩人論の中で「詩的真美の法則」というこの言葉を繰り返し用いて、その重要性を強調している。

言うまでもなく、優れた詩が生まれるためには、何よりも詩人の心に優れた「詩想」(思想)が存在しなければならない。そしてこの「詩想」こそが詩作の原動力でもある。「詩想」とは、換言すれば「詩の内容」のことであり、詩人の心に浮かぶ有形無形の「映像」(イメージ)であり、それはアーノルドが「詩は思想と芸術が一体化したもの」という場合の「思想」のことでもある。アーノルドは一連の詩論・詩人論の中で、この詩想(思想)のことを idea とか doctrine、あるいは substance and matter 等の別語に置き換えても使っている。

アーノルドの言う優れた詩想(思想)とはどのようなものであろうか。アーノルド自身の言葉で言えば、それは次のようになるであろう。例えば『詩の研究』の中で「英詩の父」Chaucer に関して言う次のような言葉がある。

he (Chaucer) has gained the power to survey the world from a central, a truly human point of view.  
(チョーサーには世界を中枢的な、真に人間的な観点から見る力が備わっている)

あるいは同じ『詩の研究』の中でスコットランドの代表的な詩人である Burns に関して言う言葉、すなわち“a voice from the very inmost soul of the genuine Burns”(真正のバーンズの胸底からの声)という言葉。

あるいはその『ワーズワース論』において、エリザベス朝以降の詩人たちの中でシェクスピア、ミルトン以来の最大の詩人と評価したワーズワースの詩の卓抜さについて言う次のような言葉、すなわちワーズワースの詩の卓抜さは「人、自然、そして人間生活について」(on man, on nature, and on human life)歌っていることであり、その詩の偉大さは「素朴で根源的な感情と(人間の)本分」(the simple primary affections and duties)に依拠した「喜び」(joy)を伝えてくれるからであり、そしてワーズワースの優れた詩には「必然的」(inevitable)な面があるという言葉。

あるいは優れた詩が持っている「真の堅実性」(real solidity)とか「高邁な真摯さ」(the high and excellent seriousness)などもアーノルドが好んで用いた言葉であり、これらはいずれも優れた詩想の属性とされるものである。

アーノルドの言う優れた詩想(思想)とは何かについて上に数点列挙したが、これらからはその基本的な性格が窺えるであろう。つまりアーノルドにおける優れた「詩想」(思想)とは、要約すれば、人や自然のような最も基本的なものを、素朴で根源的な喜びを与えてくれるもの

を、胸底から必然的にほとばしり出てくるものを、多くの詩人たちに見られるような術学的・教訓的で上っ調子のものでなく深く心の中枢に堅実に実在するものを、そして対象への真摯な共鳴(同情)から喚起されるものを指しているのである。

けれどもアーノルドの言う「詩的真美の法則」においては、真に優れた詩が成立する条件としては上述の優れた詩想(思想)だけでは不十分なのである。優れた詩が成立するためにはもう一つの条件、すなわち優れた表現が必要なのである。詩における内容と表現のこの密接不可分の関係をアーノルドはしばしば強調し、例えば『詩の研究』の中で次のように言うのである。

But for supreme poetical success more is required than the powerful application of ideas to life; it must be an application under the conditions fixed by the laws of poetic truth and poetic beauty.

(が、優れた詩が首尾よくできるには詩想を強力に人生に適用する以上のものが必要である。つまりそれは詩的真美の法則に沿った条件下の適用でなければならないのである)

「詩的真美の法則に沿った条件下の適用(表現)」とは、漢語にいう「推敲」のような、いわゆる“diction”(措辞、言葉遣い)だけを意味しているのではない。措辞に加えて、どのような詩形、どのような韻律、あるいはどのような筋立てを採るのかなども含めた「表現全般」のことを意味しているのである。そして「表現全般」には、上に引用した“the powerful application”という言葉にあるように「強力な適用(応用)」が含まれるのである。

つまり表現は、詩人の真摯な想い、熱誠の心情がこめられた表現、アーノルドの言う「必然的」(inevitable)な、心底から流露する想いに支えられた表現でなければならないのである。アーノルドはこのような「表現全般」に関する言葉を、例によって簡潔な別語で置き換えている。すなわち“diction and movement”あるいは“style and manner”などの言葉がそれである<sup>7)</sup>。

以上アーノルドの言う「詩は思想と芸術(技術)が一体化したもの」という詩観を、その典型的なパラフレイズである「詩は詩的真美の法則の下に表現されていなければならない」という言葉に拠って見て来たが、これを要約すれば次のようになるであろう。

すなわち、我々人間の生活は、時空を超えて同じ条件下に置かれているということである。換言すれば、我々の人生は思想と応用(技術)の無数の連鎖によって成り立っているということである。人間も自然の一部であることを思えば「自然の理法」とも呼ぶべき人生のこのような構図は、古代ギリシア人においても、19世紀に生きたアーノルドにおいても、現代に生きる我々においても変わらないはずである。

前に引用した美学者の井島勉氏は「生とは、何らかの対象との何らかの関連として特色づけられるであろう」<sup>8)</sup>と言っているが、まさにその通りであろう。

現代に生きる我々は、日々刻々何らかの対象と関わって諸問題に直面し、考え、それら問題のより良い解決・実現に向かって努力している。そして考え(思想)の実現のためにさまざまな工夫(技術)を用いているであろう。そして、すばらしい「思想」がすばらしい「技術」と結びつけば、すばらしい社会、すばらしい人生が「創造」されるはずである。逆に、低劣な「思想」が低劣な「技術」と結びつけば、社会も人生も低劣なものとなるはずである。

「詩は思想と芸術(技術)が一体化したもの」というアーノルドの言葉は、自ら詩作に関わっていたアーノルドが如上の思想と技術(芸術)の必然的な関係を熟知していたことを如実に示している言葉なのである。と同時に、「詩は詩的真美の法則の下に表現されていなければならない

い」という言葉は、優美と英知を本質とする「教養」の原型を、思想と技術が優れて調和し一体化した典型例を、アーノルドが詩に見ていたことを如実に示している言葉なのである。

\*\*\*\*\*

この論文において見てきたアーノルドの教養観は、英語で言う“aestheticism”の系列に属するものと言うことができるであろう。それは審美主義、唯美主義、あるいは耽美主義と訳されたりするが、審美主義は、要するに、美に至高の価値を置く思考傾向のことである。

前述したように、美には優美、悲哀美など無数の類型があり、どのような美を好み評価するかは主観に負うところが多い。美は相対的なものである。けれども、詩に限らず一般に優れた価値を持つ文化的所産は、きわめて主観的・個性的でありながら同時にきわめて客観的・普遍的なものであるということを想起する必要がある。

アーノルドの審美主義は、同じく審美主義といっても、例えば19世末の Oscar Wilde のような極端な芸術至上主義ではない。価値あるものの多くがそうであるように、美にも一流、二流、そして三流の美があるであろう。アーノルドが掲げるのは一流の美、アーノルド自ら“real classic”あるいは“great classic”と呼ぶ最高級の美をなす古典である。

そして、アーノルドが掲げるこのような最高級の古典の実例とは、ホメロス、ダンテ、シェクスピア、そしてミルトンなどの詩人である。ワーズワースもこの古典の部類に属する詩人と言えるであろう。これらの詩人たちの詩は、きわめて主観的・個性的でありながら、同時にきわめて客観的・普遍的な価値を持ったものでもある。

単に美を重視するという立場、すなわち最も広義の審美主義なら、それは人間の多少とも洗練された文化が興った時点ですでに存在していたはずである。否、むしろ人間は、多少とも洗練された文化を持つ遙か以前から、自然の被造物として自然の理法(宇宙の秩序)に導かれ、暗々裏に美を指向していたかもしれないのである。

詩人であると同時に自然科学者でもあったゲーテ(1749-1832)は、アーノルドが著作の中でしばしばその名を挙げている人であり、同時代のヨーロッパの思想家たちに大きな影響を与えた人であるが、人間を自然の延長(一部)とみなし自然の理法の支配下にある存在とみなした人である。

その著作『格言と反省』中にある言葉「美は、隠れた自然の法の現れである。自然の法則は、美によって現れなかったら、永久に隠れたままではいるだろう」<sup>9)</sup>という言葉は、美を自然の、そして自然の一部である人間の法則と見るゲーテの思想をよく示している言葉である。

そして、もしゲーテのこの言葉を「真理」として肯定するならば、人間は美を求めるもの、人間の幸福は美に存するもの、美は至高の価値を有するものという審美主義的立場には永遠不変の「真理」が、「自然の理法」が含まれていると言えないだろうか。

イギリスの思想界、文学界に審美思想が盛行したのは19世紀に入ってからである。例えば、19世紀初頭のロマン派の詩人たちは多くが優れた詩論をものしており、それらはいずれも真、善、美、人生、社会、創造、生成発展、想像力、自然の理法、宇宙の秩序、神の意志、あるいは実在(reality)などについて言及し、美との関連においてこれらを論ずるという点で通底している。そしてこの審美思想は、19世紀後半に至ってさらに盛行するのである。

19世紀のイギリスの思想界、文学界には大陸からの、とりわけ当時の文化先進国であったフ

ランスとドイツからの影響が大きい。この論文で述べたアーノルドの教養観にもこのような大陸からの思想的影響が認められることは指摘しておいてよいであろう。現にアーノルドは、一連のエッセイの中で、「実用」(practice)を重視する功利主義的傾向が強いイギリスの思想界に比して自由闊達な議論が展開されるフランスの知的風土をしばしば羨んでいるのである。

筆者は、アーノルドの教養観は、このような時代と社会の影響下にありながら、しかも時代と社会を超えて現代に通じる強烈な個性と普遍性を持っていると考える。アーノルド当時の審美思想の状況について、審美眼の涵養と教養の密接な関係について、そしてアーノルドの審美的教養観が現代の世界、とりわけ日本の大学界に通用するかどうかについて——これらについては稿を改めて論じてみたい。

### 〔注〕

- 1) 「知識の人間化」については、アーノルド自身が『教養と無秩序』の第一章「優美と英知」(Sweetness and Light)の終章近くで言葉を換えて説明している。「知識の人間化」とは、要するに、その時代の最高の知識・思想を「優美と英知」の方向の下に広く社会に広めることを意味している。アーノルドは、このような真の教養人の具体例として18世紀ドイツの詩人・批評家だったレッシングとヘルダーの名前を挙げている。  
 なお、本稿執筆で使用したテキストは『教養と無秩序』については *Culture and Anarchy*, ed. J. Dover Wilson, Cambridge U. P., 1932を、他のアーノルドの著作については *The Complete Prose Works of Matthew Arnold*, ed. R. H. Super, The University of Michigan Press, 1960-77を使用した。
- 2) G. M. トレヴェリアン『イギリス史3』、大野真弓監訳(みすず書房、1975)、pp. 112-15。
- 3) この「優美と英知」という言葉は、アーノルドが『教養と無秩序』の中で自ら述べているように、元来イギリス最大の風刺作家である Swift が風刺散文 *The Battle of the Books* (1704)の中で「最も高貴な二つの物」として使った言葉である。今日では Swift の言葉としてよりもアーノルドが使った言葉として有名になっている。
- 4) 最も根源的な価値としてしばしば挙げられるのが「真・善・美」であるが、アーノルドが美を善(道德)と一体化して考えていたのは明らかである。アーノルドは例えば『ワーズワース論』の中で、詩とは道德観念(moral idea)の反映であると再三強調している。
- 5) 井島勉『美学』(創文社、現代哲学叢書、昭和33年)、pp. 37-38 ; 69。
- 6) アーノルドが詩論の中で好んで引用した言葉がワーズワースのこの「序文」中の「詩はすべての知識の息吹であり、より純粋な精神である」(Poetry is the breath and finer spirit of all knowledge)という言葉である。ワーズワースはまた「詩はあらゆる知識の最初にして最後のもの」(Poetry is the first and last of all knowledge)と言い、詩とは「宇宙の美の肯定」(an acknowledgement of the beauty of the universe)であるとも述べている。自然や人間を含む宇宙を一元的に見、そこに普遍的な法則や理法を認め、实在の有無を主観的に論ずるといった思想傾向(主観主義)は大陸、とりわけドイツの思想界からの影響が指摘されている。
- 7) 優れた思想と優れた表現が結びつければ一流の詩ができるかといえば、必ずしもそうではない。一流の詩ができるには、もう一つの条件が要る。その条件とは「靈感」の問題である。アーノルドはこのことを熟知していて「ワーズワース論」の中で「(優れた表現は)詩人の意のままになるものではない。ここに詩神、靈感、神、非私の役割がある」(It is within no poet's command; here is the part of the Muse, the inspiration, the God, the 'not ourselves.')と述べている。わが国でも大正期の代表的な作家・芥川龍之介が『侏儒の言葉』の中で「気韻は作家の後頭部である。作家自身には見えるものではない」と同様のことを述べているが、真に優れた詩(文体)には、靈感とか気韻に裏打ちされた独特の品格が漂っているものである。詩における靈感の

役割を自覚していたことは、アーノルドがいかに的確な詩眼を持っていたかを示しており、アーノルドが評価するのはこのような生動的な詩であることを示唆している。表現については、西洋には古くから詩学や修辞学の伝統があるが、当時の文体論の本場フランスからの影響が大きいと思われる。アーノルドはフランスをヨーロッパで最も活気ある国として評価している。

8) 井島勉、前掲書、p.94。

9) 『ゲーテ格言集』、高橋健二編訳、新潮社、昭和27年。自然と人に関するゲーテの興味深い思想は「自然に関する断片」中の次のような言葉にも見られる。「最も不自然なものもまた自然である。至る所に自然を見ない者は、どこにも自然を正しく見ない」「人は自然の法則に従っている。たといその法則に反して働いているような時でも」。ただし、ゲーテの詩については、アーノルドは必ずしも高い評価を与えなかった。